

帝国主義論

——シュンペーターとレーニン——

小野進

非マルクス主義的帝国主義論の一つとして、シュンペーターの帝国主義論をとりあげるのは、第一に、それが戦後の非マルクス主義的帝国主義論の基本的な源流の一つであるからであり、第二に、レーニンの『帝国主義論』と同一の時期の現実的状况を対象としているからである。もし学説の有効性（客観性）が、客観的實在（現実の政治経済過程の本質）を反映しているかどうかによって依存するとすれば、同一の歴史的条件の下での帝国主義の一般理論に関するシュンペーターとレーニンの対比は、シュンペーターの帝国主義論の理論的性格を評価する上で意味がある⁽¹⁾。

(1) このことは、理論が実践に依存すること、理論の真理性が実践によって検証されるということ、そしてさらに論理の端緒が与えられた客観的現実ではなくて社会的実践（生産活動、階級斗争、科学活動）にあることを否定しない。

近代経済学とマルクス経済学の相違は、基本的に「ブルジョワジーとプロレタリアートの階級的利害の対立を基礎にした社会的実践の方法に規定される。実践は、客観的世界の变革—生産活動、階級斗争—主観的世界の变革（認識能力の变革）—科学活動」、主観的世界と客観的世界の關係の变革であるかぎり、理論は客観的實在の反映でなければ、実践目的を實現できない。理論が階級的主義によってのみ規定される側面だけを見て、客観的實在の理論への模写の意義をみないのは相対主義であり、いかなる階級の理論が

正しいのか理解することができない。これに反して実践を無視して、理論への客観的實在の反映だけをみるのは、機械論的唯物論である。

近代経済学とマルクス経済学の理論内容の相違は、ブルジョワジーとプロレタリアートの社会的実践の仕方の相違によってとりあげられる、客観的対象の範囲の相違によって規定されるのではない。何故ならば、ブルジョワジーも、自己の実践活動を通して、客観的現実についての正しい認識をもつのであるが、それが自己の階級的利害との対立を意識するならば、正しい認識に目をふさぎ、自己に有利な理論を固執する。

一 帝国主義とは、国家の際限なく拡張を強行しようとする無目的・素質である。⁽¹⁾ シュンペーターによれば、政治的、経済的、その他の具体的利益を目的とした国家の侵略的行動は、帝国主義でない。侵略的行動それ自体が帝国主義の本質である。そこで具体的利益とは、つぎの三条件が満足される時であり、その場合には帝国主義は問題にならない。別言すれば、三条件がかなえられない時に帝国主義が問題になるのである。

三条件、(一)当該国民の社会構造、心理状態、境遇などを考慮に入れた上で、観察者がそれとして看取することのできるような利益が現実存在すること、(二)当該国の行動が、予想利益と比較して、全体として犠牲が小さいと予想され、この利益の實現を推進するのに役立つこと、(三)具体的利益が国家の行動の背後にある政治的な推進力であるということが証明されること。

シュンペーターは、以上の三条件は現実には満足されていない場合が多いと考え、具体的目的や理由から、まったく独立したところの永続的な性向、勝利そのものの故に勝利を求める意志はどうして生れてくるのか、という問題を考える。彼によれば、それは、究極的に「経済史観」的に説明されうると考えられている。但し、「経済史観」を、「政治思想や政治感情はその時代の単なる生産情勢の単なる反映ないしは対応物でないという

ことを前提した上で」のことである。政治思想、政治感情は持続性をもっているから、いつでも過去の時代の生産事情によって支配される。シュンペーターの批判の対象である、ネオ・マルキシズム (Oto Bauer, Rudolf Hilferding) の立場は、帝国主義を、資本主義発展の特定段階における資本家上層階級の諸利益の反映としているが、彼によると、これは「経済史観」から論理的に推論されたものでない。

シュンペーターは、「標語としての帝国主義」と「帝国主義の実践」とに区別して帝国主義論を展開する。シュンペーターの『諸帝国主義の社会学』は第一次大戦中に書かれたものであり、ゴットフリード・ハーバラー (Gottfried Haberler) によれば、シュンペーターは、「第一次大戦中、自己の平和主義的・新西欧的(特に親英的)・反動的な態度をかくそうとしなかった」、⁽²⁾といわれている。シュンペーターは、十九世紀のイギリスにおいて実践上の反帝国主義がどのように発展してきたかをみることによって、英国においては、帝国主義が単なるキャッチ・フレーズ以上のものではないことをみた。それは「標語としての帝国主義」と呼ばれるものである。このことは、シュンペーターの意味での、イギリスの十九世紀における反帝国主義的感情の形成であり、理論的にシュンペーターが帝国主義の批判者であったということの意味しない。

帝国主義がキャッチ・フレーズでないとすれば、帝国主義の具体的様相はどのようなものであるか。

彼は、エジプト帝国主義、アッシリア帝国、ペルシア帝国の基本的な共通性と特徴的な差異を明らかにし、つぎにアラビア帝国主義、アレキサンダー大王の帝国主義、ローマ帝国主義について言及している。以上の太古における帝国主義の分析によって得られた基本的な特徴は、(一)無目的な武力による拡張への傾向は人類の歴史において大きな役割を演ずるという事実である。(二)戦争を求める意欲は、単に「衝動」だけではなく、階級が生

存するために武士にならざるを得なかったという客観的な生活上の要請の中に説明を求め、太古のそのような環境の下で得られた心理的素質と社会的構造とが、一度確立されるといつまでも持ちつづける。例えば、ベルシア帝国主義の形成の契機は、その地理的事情のため、戦争が生存を維持するための唯一の方法であり、生活環境がベルシア人を武士民族たらしめた。(三)戦争を求める性向ないし構造の存続を助長する第二次的要因が存在していること。それは第一に支配階級の国内政治上の利害関係が好戦的な性向を助長したこと。第二に戦争政策によって経済的、社会的にそれぞれ個人として利益をうけるような人達のもつ影響が一つの役割を果たしていること。(三)換言すれば、帝国主義は「隔世遺伝的」である。現在の生活環境から生れてくる要素でなくて、過去の生活環境の要素から生れてくる要素である。史的唯物論の表現でいえば、現在の資本主義的生産関係から生れる要素でなく、資本主義に先行する諸形態から生れる要素である。その意味で、感情的反応に関する個人的・心理的慣習の「隔世伝」である。しかし、資本主義に先行する生産諸関係の基礎上で形成された帝国主義は、その基礎が消滅したのだから、帝国主義は徐々に消えていくべきものである。帝国主義は人間と文化との歴史の中で後になつて現われてくるものほど、その強度を減じているはずである。

近代の帝国主義は絶対君主国からうけついでものである。資本主義の内在的諸力によって発展したものでない。たとすれば、帝国主義に対する資本主義の意義は何か。資本主義は、帝国主義的性向を助長せしめ、存続せしめる第二次的要因であるのか。

シュンペーターによれば「純粹に資本主義的土壤の上には、帝国主義的衝動は育ちにくい」⁽⁴⁾しかし、帝国主義的拡張に対する利害意識はありうる。資本主義の発展は、資本主義的企業家、労働者階級、知識階級(新中産階

級)、金利生活者の四つの社会層を生みだし、企業家の政治的・経済的地位の向上にしたがい、企業家の生活様式、思考形態が社会生活の上で重要になる。これらの諸階級は封建的な諸関係から解放され、民主化され、個人主義化され、合理化され、純粹に本能的なものは、資本主義の発展とともに後方にしりぞく。したがって、帝国主義の本能は消滅する。このようにして、シュンペーターは、資本主義の反帝国主義的性格を主張する。資本主義化(近代化)が進めば進むほど、反帝国主義的傾向があらわれる。⁽⁵⁾にもかかわらず、現実には資本主義の下に帝国主義は存在するのは何故か。それは、資本主義の外からもちこまれた非資本主義的要素によって維持されている異質的なものである。近代帝国主義は、一方では経済的利害を持つ社会層と、他方で、非資本主義的要素を源泉とする帝国主義的傾向により構成されている。したがって問題は、この経済的利害関係が資本主義の本性に内在しているものかどうかということの説明すれば、帝国主義は資本主義にとって異質的なものであるかどうか明白になる。

帝国主義政策(戦争政策、保護政策、独占価格、トラスト、輸出独占主義等)によって得られる経済的利害は、シュンペーターによれば、基本的には承認されないのである。何故ならば、「カルテルやトラストの発生は……自由競争制の自動的運動によって説明されるものではない。この点、カルテルやトラストが保護関税の下においてでなければ、その主目的——独占政策を遂行するという——を達成することはできなく、保護関税のないところでは、その本質的意義を失う……」。保護関税制度は自由競争制から自動的に生れてくるのではないのだ。それは政治的行為の所産である⁽⁶⁾」

戦争政策によって利益を受けるのは、軍需産業の企業家たちと、おそらく少数の有力な大地主だけである。戦

時利潤はいつも帝国主義の支持要因であるが、この要因だけで資本主義下の大衆を帝国主義的方向に向わせることはできない。

保護関税で利益を受けるのは大地主だけであり、また輸出独占主義により利益を得るのは、企業家とその同盟者の金融界の指導者である。資本主義の発展は、特にヨーロッパにおいては、産業組織が自由競争にたえなかつたために絶対主義国家によって人為的に保護された「経済的利益」が、根強く存続して資本主義の発展に影響をあたえた。シュンペーターはこの原因を「資本主義による農村の変革が不徹底」であつたと考えている。国内市場が農業における「半封建性」によって狭隘化することに輸出独占主義の必然性があり、輸出独占主義は自由競争制下での企業の大規模化の必然的結果として生みだされたものでなかつた。

かくして、近代帝国主義は、「君主国家の遺産である。すなわち君主国家の構造要因や組織形態や利益関連や人的態度などの残存物であり、また前資本主義的諸力の産物である」⁽⁷⁾。

- (1) J. A. Schumpeter, "Capitalism, Socialism and Democracy" P. 405. によれば、帝国主義とは、一つの政府の支配を、国民性を同くする団体以外の他の団体に彼等の意志に反して拡張することを目的とする政策である。
- (2) Joseph Alois Schumpeter, Quarterly Journal of Economics, August 1950, p. 359. ハリス編『社会科学者シュンペーター』中山伊知郎、東畑精一監訳、坂本二郎訳九二ページ。
- (3) Imperialism and Social Classes. by J. A. Schumpeter translated by Heing Norden, edited and with an introduction by Paul. M. Sweezy, New York. 1951. p. 83-4 都留重人訳『帝国主義と社会階級』一一四—一一五ページ。
- (4) ditto. p. 90 邦訳一一二ページ。
- (5) (イ) 資本主義世界のどこをみても、殊に近代社会生活のうちの資本主義特有の諸要素のあいだでは、戦争や領土拡張や内閣外交や軍備や職業軍人ならびにその人たちの社会的地位などにたいする原理的反対がおこっている。この反対は、最初に資本主義化したイギリスにおいて、イギリス資本主義の発展と歩調をあわせている。

- (ロ) 資本主義が浸透すると、どこでも強力な平和政党が出現したので、戦争を起そうとすると国内政治上のたたかひを必要とした。
- (ハ) 労働者階級はどんな場合でも熱心な反帝国主義者である。
- (ニ) 戦争防止の方法や国家間の紛争を平和的に解決する方法が発達した。
- (ホ) アメリカほど前資本主義的要素や残存物などを背負いこんでいるところは少ない。したがってアメリカほど帝国主義的傾向を認めずこの少い国はない。

(6) Imperialism and Social Classes. p. 117-118. 邦訳一四六ページ。

(7) ditto. p. 128. 邦訳一七五ページ。

二 以上がシュンペーターの帝国主義論の内容である。シュンペーターの分析方法の一般的特徴をレーニンの『帝国主義』論との対比で示めすならばつぎのとおりである。

近代経済学は社会の発展過程や歴史過程を与件として、社会学の考察にゆだねる。シュンペーターは、近代経済学のこの伝統的手法にしたがって、資本主義にとって異質的なものである帝国主義を社会学的に考察している。故に「諸帝国主義の社会学」(Zur Soziologie der Imperialismen)である。与件としての帝国主義がどのように発生し、機能し、消滅するのかを追跡している。資本主義の発展理論については別著で論じられる。⁽¹⁾これに対してレーニンの『帝国主義』論は、いうまでもなく、社会発展の法則の見地より、資本主義の内在的發展の結果としての帝国主義を歴史的に位置づけ、総体として資本主義的世界経済がどのように発展するのかを説明している。⁽²⁾にもかかわらずシュンペーターは資本主義の帝国主義に対する関係についてふれ、独占資本主義段階での経済諸現象(独占価格政策、トラスト、保護関税、輸出独占主義)を問題にせざるを得なかった。独占と資本主義の関係については前述したとおりであり、したがってこの限界においてレーニンの『帝国主義』論の諸命題との対比は許されるのである。⁽³⁾

シュンペーターでは、カルテル・トラストは、自由競争制の中から発生しない。保護関税の下においてのみその目的を達成することができるのである。レーニンにおいては、「例外的に誠実な一ブルジョア経済学者は、このような結論に到達せざるをえなかった。だが、注意しておかなければならないことは、高い保護関税によるドイツ工業の保護ということのゆえに、彼がドイツを特別あつかいしている点である。しかしこの事情は、集積と、企業家の独占団体、すなわちカルテルやシンジケート等の形成とを、たんに促進しただけである。きわめて重要なことは、自由貿易国のイギリスでも、集積は、いくらおそくは別の形態であっても、やはり独占にみちびきつつある、ということである。」⁽⁴⁾ 保護関税は生産の集積とカルテル・シンジケートの促進要因であり、シュンペーターが考えるように保護関税がなければ、カルテル・トラストの目的が達成できないというようなものではない。彼は生産の集積と独占の生誕を無視しているので、「保護関税か自由貿易かという点での個々の資本主義国のあいだの相違は、独占の形態もしくはその出現の時期における非本質的な相違を条件づけるにすぎないの⁽⁵⁾にたいして、生産の集積による独占の生誕は、総じて、資本主義の発展の現在の段階の一般的かつ根本的な一法則である」ということが理解できない。シュンペーターにおいては、資本主義経済の下では「資本家」と企業家は基本的に対立している。独占資本主義はこの対立を除去し、大銀行とカルテルとが結合し、銀行の指導者としては国民経済の支配者である。そして「資本主義は一種の中央機関をもつことになり、自動調節作用に代って意識的決定を行うようになる」⁽⁶⁾。シュンペーターは銀行の役割をこのように考えている。シュンペーターはつづけていう。「大銀行は大産業と結託し、時には資本一般の利益さえかえりみないことがある。普通の「小」資本家は、強制的な輸出政策の費用を受けもつのであって、その恩恵をこうむるものではない。

小資本家は道具として使われ、かれの利害は問題とならないのだ」⁽⁷⁾彼は、一面では大銀行の支配と強制の関係を認めながら、他面では、銀行による「意識的統制」なるものが、「完全に組織化されたひとにぎりの独占者による公衆の略奪である」⁽⁸⁾という側面を見落しているのである。

シュンペーターの輸出独占主義論も、保護関税と同様に資本主義の自由競争制度の下から生成するものでない。「資本主義は生産を大規模化する。しかし、ごく稀な例外的場合のほかは、生産が大規模化したからといって、それぞれの産業に残る企業の数がわずか一つか二つになってしまいうほど集中が無限に進行するということは決してない。むしろ事態はその逆であって、個々の工場は、一定の場所では、それが一定の大きさに達すると、もはやそれ以上の拡大はできないという限界につきあたる。……こうした限界以上に企業結合を推進させるような内在的傾向は、自由競争制の下では存在しない」⁽⁹⁾。この点にこそ独占段階における経済的諸現象を、生産の集積と独占形成を基礎に考察するレーニンとシュンペーターのちがいがあつた。これが彼の生産集積論である。シュンペーター的集積論の見地に立つかぎり、輸出独占主義もカルテル・トラストも、自由競争の産物でなく、他の何物かの結果によって説明しなくてはならない。かくして輸出独占主義の必然性は、ヨーロッパにおいては、農業における「半封建性」、それにもとづく国内市場の狭隘、その結果として輸出独占による国内産業の保護を必要とする。

シュンペーターが強調したことは、要するに、あらゆる帝国主義的現象は、資本主義の自由競争制度のなかから生成したのではなくて、資本主義に先行する社会における非資本主義的要因によってか、あるいは政治的要因によって維持されているということである。

帝國主義の本質は、具体的利益を目的としない侵略的行動それ自体にあることは、前節にのべた。そして具体的利益とは、「三条件」(一)当該国民の社会構造、心理状態、境遇などを考慮に入れた上で、観察者がそれとして看取することのできるような利益が現実⁽⁹⁾に存実すること、(二)当該国の行動が、予想利益の実現を推進するのに役立つこと、(三)具体的利益が国家の行動の背後にある政治的な推進力であるということが証明されること)によって規定されることを知っている。シュンペーターは「三条件」が満足された場合、シュンペーター的帝國主義の本質規定にしたがい、彼にあっては帝國主義は問題にならない。レーニンにとっては、むしろ反対にこの「三条件」、とくに(三)の具体的利益が国家の行動の背後にある政治的な推進力であること、こそ最大の課題であらう。レーニンは『帝國主義』論で、「現在の戦争と現在の政治とを評価する上で、それを研究しておかなければならぬものをも理解できない基本的な經濟問題、すなわち帝國主義の經濟的本質にかんする問題を解明する」⁽¹⁰⁾といっている。

シュンペーターの帝國主義研究における目的の一つは、所謂ネオ・マルキシズムの帝國主義論批判である。したがってシュンペーターのヒルファデーニングに対する批判を通じて、彼の帝國主義観をみることができる。彼はヒルファデーニングが、資本主義制度はそれに内在する必然性によって破綻するというマルクスの命題を捨てた点にその功績があつたと評する。ヒルファデーニングの「組織された資本主義」を讚美するのである。他面、ヒルファデーニングが、帝國主義を資本主義の内在的な発展段階として把握したことを誤謬だと考える。ヒルファデーニングがもしそのように理解しているのであれば、ヒルファデーニングは正しい。レーニンは、「組織された資本主義」の讚美論者である、ドイツ帝國主義の弁護者で、ドイツの教授・シュルツ・ゲヴァニッツ (Schulze-Gaerentz) に対して、「ひとにぎりの独占者による公衆の略奪である、ということを知りつづぶそうと努めている」⁽¹¹⁾

と述べている。ヒルファードィングのいま一つの欠点は、寄生性と資本主義の腐朽化についての評価が不十分なことである。この面ではホブソン (J. A. Hobson) より一步後退しているのである。シュンペーターとヒルファードィングの類似性は、両者が生産と資本の集積が独占を導くという基本的な部分を無視していることにある。このことがやはり両者が「寄生性」と「腐朽化」の面を見落すことと関連している。「独占」は帝国主義のもっとも深い経済的基礎であり、この資本主義的独占は、「資本主義のなかから発生して、資本主義、商品生産、競争という一般的環境のうちであり、しかもこの一般的環境との不断の、そして解決の道のない矛盾のうちにある独占である。だがそれにもかかわらず、この独占は、他のすべての独占と同様に、不可避免的に停滞と腐朽化への傾向を生みだす⁽¹²⁾」のである。シュンペーターがヒルファードィングとちがう点は、シュンペーターは、帝国主義の隔世遺伝説によって帝国主義のもっとも基礎的な「生産の集積と独占」を否定している点にある。レーニンによれば、ヒルファードィングは貨幣問題で誤りをおかしたが、その著『金融資本論』は、「資本主義の発展における最新の局面」の貴重な理論的分析なのである。これに反して、シュンペーターの『経済発展の理論』はレーニンにより消極的な意義すら承認されていない⁽¹³⁾。「独占の形成」は資本主義発展の一つの成果として、企業者活動を制限するものとして、シュンペーターでは考えられている。シュンペーターの論理に内在して考察を加えるならば、彼の「資本主義発展論」では、自由競争は独占的現象を必然化さすのである。「帝国主義論」では、資本主義の自由競争制度と独占の関係が語られていない。この面の論理的連関こそ、内在的考察に即すれば、シュンペーターの論理矛盾である⁽¹⁴⁾。

要するに、あらゆるブルジョア社会科学の諸帝国主義論の一般的特徴は、帝国主義のもっとも奥深い経済的基

礎である「独占」をみようとしなない点であるが、シュンペーターも例外ではない。ただシュンペーターは「超歴史的」な「隔世遺伝説」にもとづいて、資本主義的独占を無視する点に、シュンペーターの帝国主義論の特殊性がある。

(1) シュンペーター『経済発展の理論』(Theorie der Wirtschaftlichen Entwicklung)、『景気循環』(Business Cycles) 参照。その批判的検討は私稿「シュンペーターの景気循環論」『立命館経済学』第十四巻第四号参照

(2) 『資本論』は資本主義の純粋に発展する内的諸傾向とその衝突を問題にしている。レーニン『帝国主義論』は、独占資本主義の矛盾を対象に、全体として資本主義的世界経済がどう発展するか、ということである。したがってレーニンでは国民経済は世界経済の一環に転化する。

(3) シュンペーターでは帝国主義と資本主義が無関係であることを論証するために主眼がおかれている。レーニンの『帝国主義』論は帝国主義が商品生産と資本主義の一般的基礎の上でどのような展開をするかをねらいとしている。この点からいえば両者は対比しようがないが、シュンペーターは現実的認識に忠実にしたががい一定の範囲内で独占と資本主義の関係を問題にしている。

(4) レーニン 宇高基輔訳『帝国主義』岩波文庫、三三三ページ。

(5) 宇高訳、前掲書、三四―三五ページ。

(6) シュンペーター 都留重人訳 前掲書 一三六ページ

(7) 前掲書 一三六ページ

(8) レーニン 前掲書 六五ページ

(9) シュンペーター 都留訳 前掲書 一四六ページ

(10) レーニン 宇高訳 前掲書 十二ページ

(11) 右同 右同 六五ページ

(12) 右同 右同 一六一ページ

(13) 『レーニン全集』三九巻「帝国主義論ノート」(四六一―四七七ページ)において、レーニンはシュンペーターの『経済発展の理論』についてつぎのようにいっている。△これまたゼロ、表題は欺瞞的、一覽すると一種の△社会学的V駄弁であることが明らか。おそらくこの問題に立ちかえらなければならないであろうが、発展のテーマについてはゼロ△

(14) 岸本誠二郎 都留重人監修 講座『近代経済学批判』I、現代の人と学説「シュンペーター」において、都留重人教授は「自由競争制が資本主義発展の一段階でしかなく、それがだいに独占集中の現象にとって代られるということは、シュンペーターの発展理論そのものの中にも見出されるのであるから、右の推論において彼がおこなっているような形式論理的な範疇化は、かれの立場からしても議論の余地のあるものでなければならぬ。この点こそがシュンペーター帝国主義論の最大の弱点であって『帝国主義論』執筆後三〇年以上も資本主義爛熟期の世界にすんだかれに、いま一度根本的な再検討を希望したかったところである。」といっておられる。

本稿は、一九六七年十月五日の立命館大学経済学部・経済理論小グループの研究会で報告したものを基礎にして作成されたものである。研究会では有益なご批判をいただいたので、とりいれるべき点はとりいれたが、承服し難いと思われる点は私見をそのままにしておいた。なおご批判をいただいた中で、本論文でいかなかった部分は他日を期したい。